

〈私〉の起源となりたちをめぐって (1)

— カウンセリング原論のための自註 (四) —

齊藤文嗣

序 カウンセリング論を身体論として構成する

私たちが日常、あまり深く考えもせず、重宝している市街地図や道路地図は、じつは不在の、遍在する視点によって描かれたものだという⁽¹⁾。言われてみればたしかにそのとおりである。私たちの〈生きている視点〉からは、地上にあってはもちろんのこと空中から静止した位置を確保できたとしても、地図的に配置されているようには海や大地を観察することはできない。実生活上の利便が、架空の死せる視点によって成立しているというパラドックスが面白い。

同じことが身体についても言えるのではないか。たとえば市街地図を、その昔小学校の理科室で出会った人体模型に置き代えてみる。表面に赤と青の複雑な網目状の線が描き込まれ、内部の臓器の仕組み、配置、形などが観察できるように、模型のいろんな所が分割して取り外せるようになっている。まだ細かな仕掛けがいくつもあったように思うが、私たちはこういった模型をとおして、これこそが人間の身体なのだと教えられた。しかしあれは地図の場合とまったく同様の、死せる、不可能な、遍在する視点によって構成され、描かれたものではなかったのか。私たちはこのような人体模型から、いったい地図と同じような利便や恩恵を獲得することができたのだろうか。

人体模型をかぎりなく精密化し、平面解剖図としても写し描き、それをさらに物理化学的記号と公式を用いて動態化する。こうやって把握された身体像をもとに、自然科学的医学が成り立ち、私たちはそこから計り知れない恩恵を享受してきた。だから私たちは身体といえば、まずは理科室にあった人体模型のごときものとして思い描き、把握することしかできなくなってしまっている。この不在の、死せる、遍在する視点から把握された身体像の呪縛はいまや骨がらみとなってしまっていて、あらためて実在の、生きた、いま・ここからの視点から身体を把握し記述することの可能性はもとより、この課題の重要性、現在性、緊急性についてもほとんど思い至ることがない。

ところで申すまでもなく、死せる視点からではなくて、新しい生きた視点から身体を記述することの可能性、およびそのことがもつ人間学全体への警告、重要性、緊急性を

私たちに教示してくれたのは、メルロ＝ポンティであった。^{(2),(3)}すでに半世紀以上も前になされたこのフランスの思想家の仕事は、いまなお輝きを失っていない。本稿はメルロ＝ポンティの貴重な示唆を踏まえて、自然科学的身体像の上にはなくて、<生きられる身体>像の上にカウンセリング論を構成することへの予備的な試みである。こういった作業に果たしていかなる意味や価値があるのか。それは本稿における具体的記述をとおしてその都度明らかにされるべきことであろう。

1. ポルトマンの身体論

1) ポルトマンの方法

私たちは一貫して一般論（ここでは人間存在の特殊性、包括性、全体性）を媒介するという方法にこだわり続けてきた。いまこれから身体論としてカウンセリング論を始めにあたって、方法的にはまったく変わりはない。そこで自然科学的な身体への視線から自由になるための最初の手がかり、離陸地点をポルトマンの業績にもとめることが相応しいと考えた。⁽⁴⁾すでに私たちは子供概念を検討した際に、ポルトマンについてつぎのような評価を与えている。⁽⁵⁾再録してみる。

人間はそのときどきのみずからの生物学的なありようにたいして、のべつまくなしに配慮することによって自然界に耐えのこってきた動物種である。そういった心身の統一体として意識する生命活動を営む人間の特殊なありようを、他の動物種と比較しつつ、もっぱら身体にひき寄せて開示してみせてくれたのがこのポルトマンであったといえるだろう。彼は生誕から死にいたる人間の身体の成長、成熟、衰退の過程が、人間的なものとして最初から最後まで貫徹しているということ、つまり人間の特殊性において人間の生物学的なあり方を考察すること、逆にいえば生命、生物一般に人間を還元、解消することを徹底して拒否することによって、全くちがった相貌のもとに人間の生物学的過程を記述してみせてくれたのだともいえよう。

だがこのかぎりでは、子供研究を方法論として検討する場合に、ポルトマンの方法がきわめて貴重であることを示唆し得たにとどまっている。ここでは単なる示唆ではなくて、身体論の出発点として、あらためて具体的にポルトマンの方法の意味と価値とをめぐって検討したい。

(1) ユクスキュルの環境世界説

比較形態学者としてのポルトマンは青年のころ、著作をとおして出会ったユクスキュルに深い影響をうけている。このことはみずから生物学者としての閱歴を記した、晩年の自伝的書物の冒頭に明記されている。またユクスキュルの二つの主要論文、「動物と人間の環境世界への散歩」(1934)と「意味の理論」(1940)とが、一書となって刊行されたとき(1956)⁽⁷⁾、そのなかに「新しい生物学の開拓者」と題してユクスキュル論を寄せたのがポルトマンであった⁽⁸⁾。ユクスキュルがなした仕事の最良の部分を継承し、同時にその限界を形態学的人間学として乗り越え再構成したこと。このポルトマンがなした業績のひとつ、だが私たちにとってはとりわけ重要なこの業績の方法的な経緯にすこし触れておきたい。

ユクスキュルの研究は環境世界、機能環、意味、計画性といったキーワードに象徴させることができる。これらのキーワードをめぐるユクスキュル自身の主張を抽出してみよう。

動物の居住世界は、その動物の周囲に広がって見えるが、動物そのものから見ればその環境世界となっており、その空間の中で多種多様な意味の担い手がぐるぐる走りまわっている。植物の居住世界はその生きている場所のまわりに限定することができるが、植物そのものから見れば、規則的な変化に支配されるいろいろな意味の要素から成り立った一つの居住世界になっている。

動植物の生の課題は、意味の担い手、または、意味の要素を、その主体の成長計画に従って利用することにある。

食物の利用についてはよく語られている。しかしその概念は、多くの場合あまりにも狭くしか把握されていない。食物のもつ意味を利用するためには、それを歯で噛みくだき、胃や腸で化学的に処理することばかりでなく、目、鼻、口でそれを認知することが必要である。

というのは、動物の環境世界においては、どの意味の担い手も、知覚(Merken)と作用(Wirken)によって利用されるからである。あらゆる機能環において、同じような知覚=作用の現象がくりかえされる。もちろんこの機能環(Funktionskreis)を、意味の担い手の利用をその課題とする意味の環(Bedeutungskreis)とみなすこともできる。

植物の場合には、機能環ということは問題にならない。けれども、同じように生きた細胞から成り立っている植物の器官のもつ意味は、その居住圏の意味の要素を利用することにある。植物はその計画にかなった構造と、非常に微細な部分にいたるまで秩序正しくつくられているその素材とのおかげで、この課題を克服しているのであ

る。(中略) 持続性をもち、意味のある形態は、つねに主体の生み出したものであり、ただ長い間、無計画に手を加えられた客体の生み出したものではけっしてない。(中略) 植物のすべての器官は、動物の器官と同様に、その形態も素材の配置も、外部から伝えられた意味の要素を利用するものとして、それ自身のもつ意味に負う所が大きい。

したがって、意味ということについては問題は、すべての生物の場合、第一に取り上げるべき問題なのである。⁽⁹⁾

たとえていうならば、あらゆる動物主体は、ちょうど、やつとこが二本の腕で物をはさむように客体をつかんでいる。一つは知覚の腕であり、もう一つは作用の腕である。動物は一つの腕によって客体に知覚標識を、もう一つの腕によって作用標識を与えているのである。これによって、客体のもつある性質は

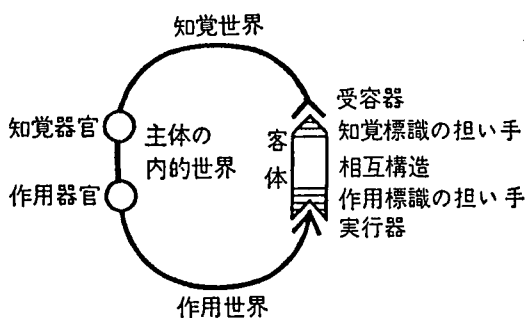


図 機能環

知覚標識の担い手となり、また他の性質は作用標識の担い手になる。一つの客体の所有するすべての性質は、客体の構造を通じてたがいに結び付けられているので、作用標識によって与えられた性質は、知覚標識の担い手である性質に対し、客体を通して必然的に影響を及ぼし、また知覚標識そのものを変化させるように働きかける。このことを簡単に表現するには次のようにいうのがもっとも適切である。すなわち、作用標識は知覚標識を拭い取るのである。(中略)

客体は一方では知覚標識の担い手、他方では作用標識の担い手——この二つの標識はある相互構造によって互いに結合しているはずのものだが——として役立つ性質を備えていなければならない、という限りにおいてのみ、主体の行動に関係しているのである。

主体の客体に対する関係は、上の機能環の図式によってもっとも明瞭に表わされる。それによって主体と客体が、いかにお互いに適応し合って整然とした全体を形づくっているかを示すことができる。さらに主体がいくつかの機能環によって同一の、あるいは異なる客体と結ばれていることを考え合わせれば、環境世界説の第一の基礎的命題の何たるかを、かいま見ることができる。つまり動物主体は、もっとも簡単なものも、非常に複雑なものも、同じ完全さでその環境世界に適応している。単純な動物には

単純な環境世界が、複雑な動物にはそれだけ豊かな環境世界が対応するのである。⁽¹⁰⁾

ユクスキュルはさまざまな動植物の興味深い生態を観察し、それらを多くの図版とともに活写している。しかしここでは、そういった具体的な観察や記述をとおして抽出された、いわば理論的骨格とみなしうる部分のみを抜粋した。第一のキーワードである環境世界 (Umwelt) と、いわゆる私たちの日常語である環境 (Umgebung) との差異の了解が、ユクスキュル理解の入り口になっている。植物であると動物であることを問わず、あらゆる生命はその種に応じた独自の対象世界との関係の仕方をもっている。主体と客体とが不可分になった関係の仕方、あるいはこの関係の仕方と不可分に展開する対象世界、それをユクスキュルは環境世界 (Umwelt) とあらためて言いなおした。であるいじょう、すくなくとも人間いがいの生物の環境世界は、私たち人間にとっては尽きることのない謎であり秘密である。観察し、推理し、それらを機能環として描写することはできても、対象として取り上げた生物そのものの世界体験は、私たちにとってはどこまでいっても彼岸のものにとどまる。

物理化学的な過程にけっして還元するすることができない、生理学的基盤を超えた機能環 (あるいは意味の環) が無限に交錯し、絡まり、そしてなお全体としてあたかも交響曲のように調和した時空を構成している。これが個体を超越した、生きた自然の計画なのだという。ユクスキュルのこういった主張、発見が生物学界からはあまり受け入れられることがなく、むしろ現在にいたるまで思想界、それもとりわけ現象学の世界において早くから注目され、評価されてきた。いきなり後期フッサールにおける〈生活世界⁽¹¹⁾〉と環境世界との区別と連関を問題にしたいところであるが、いずれメルロ＝ポンティの身体論を検討するときに触れることができるであろうから、ここではポルトマンとの区別と連関のみを問うことにしよう。ところでユクスキュルは、私たち人間にとっての環境世界をどのように把握していたのであろうか。該当部分を抽出してみよう。

われわれ人間が動物に勝っている点は、生来もっている人間の本性の広がりを広げることができるというところにある。なるほど人間は新しい器官を作ることはできないが、補助手段を与えることはできる。知覚道具も、作業道具も人間が作った。そしてそれを利用できる人間の一人一人に、その環境世界を深め広げる可能性を与えるのである。環境世界の範囲からはみ出すものは何一つない。

自然の中では一切が、その意味に従って作られており、すべての環境世界がいろいろな声部としてこの世界の総譜の中に組み入れられているのだという認識のみが、自己の環境世界の限界から抜け出す道を開いてくれるのである。

われわれ人間の環境世界空間を百万光年ものかなたまで広げることが人間を高める

のではない。人間の人格的な環境世界の外に、人間や動物の同胞の環境世界がすべてを包括するような計画のもとに包まれているのだという認識が、人間を高めてくれるのである。⁽¹²⁾

みられるとおりユクスキュルは、人間も他の動物同様に自分自身の環境世界に住んでいるのであるが、目的的に行動しうる能力や自らの本性を拡張することを可能にする道具作成能力は、人間の他の動物よりも勝った点であると認めている。にもかかわらず、人間といえど自然という母胎に組み入れられているいじょう、環境世界の範囲からはみ出すものは何一つない、と断言して疑うところがない。自然の計画性、あるいは自然の意味の環にすっぽりと包み込まれているのだという点において、人間と、人間以外の動物とが疑問の余地なく等置されてしまっている。

(2) ユクスキュルからポルトマンへ

ポルトマンは上記ユクスキュルの人間観を、主としてマックス・シェーラー⁽¹³⁾を媒介してユクスキュルを批判し、乗り超え、そして自らの独創的な比較形態学的人間学(本論ではむしろ比較形態学的身体論とよぶべきか?)を築いたのであった。ポルトマンのユクスキュル批判を、順を追って丁寧に抽出してみよう。⁽¹⁴⁾

あらゆる種類の動物がもっている特有の環境世界に関するユクスキュルの学説は、近代生物学の主要な部分となった。しかしこの学説を人間にまで広めるといふ彼の考えが、最初から反論を浴びたのは当然のことであった。(中略)ユクスキュルの環境世界説で決定的な点は、ネコ、ウマ、サルがみな同じ哺乳類であるにもかかわらず、この環境世界というものが、その種に応じた特有の形態をもっているという考え方にある。

けれどもユクスキュルは、この環境世界の概念の説明として、個々の人間が生活しているさまざまな世界があることを強調するのである。そして彼は、樹木を例にあげて、同じ一つのものが、さまざまな人間の生き方に応じてまったく異なるトーンを付与されるという状況を述べている。しかし、その場合彼は、このようなさまざまな世界の姿が、共通の種の世界に関わっているということ、このような種々の環境世界を「理解する」のは可能であるということ、つまり考え方の矛盾について意見を出すこともできるという事情をあまり重要視していない。

自己の固有の世界が根をおろしている人間世界の共通性の領域 (Gemeinschafts-

Sphäre) —— (中略)、この原則的な理解の可能性を大きく包括しているもの、それが人間に固有の状況を作り上げている。素質の違いや伝統によって生じた人間世界の対立をどれほど大きく考えたとしても、それはすべて一つの領域に含まれている。すべての文学作品は、そのようなさまざまな世界観、それらの出会いというものを描くことで生きている。(中略) しかしまさにそれゆえに、世界像についての人間の考え方の対立を認識するためにこの概念(環境世界——引用者)を用いることは排除されなければならない。というのは、現代の哲学的人類学の立場に立つ人々は、動物の「環境に拘束された」行動に対するわれわれ人間の「世界に開かれた」行動という認識のしかたから出てくるきわめて独特な問題を放棄しているからである。

現代の生物学は、肉体的なものすなわちいわゆる「^{ソマートイシュ}身体的なもの」と、それから分離した精神的なもの、つまり「^{プサイヒシュ}心的なもの」とを研究するのではない。そうではなくて、われわれは今日行動の研究によって、今まで知られていなかった現実があるがままの姿でかつて導入された心と体という分類に先んじてまずその現実を本来われわれに与えられた統一体として経験し、その活動状態の中で認識しようと努めるのである。同じように新しい人間学、現代の人類学も、もちろん人間の行動、その関係様式の特性に目を向け始めている。そして、この研究より先におこなわれた肉体一心一精神、ピオスとロゴスというような「構成要素」の境界づけをまったく認めないのである。

ポルトマンがいうところの、動物の「環境世界に拘束された」行動に対するわれわれ人間の「世界に開かれた」行動という認識のしかたから出てくるきわめて独特な問題、この問題の理解がユクスキュルとの決定的な境界をなしている。ユクスキュルが自然の計画という概念でもって否定し消し去った、人間における目的的行動と動物における本能的行動との区別を、一方は「世界に開かれ」他方は「世界に拘束され」ているものとして、ポルトマンは肯定する。さらに上記の抽出のなかでは、とりわけ「自己の固有の世界が根をおろしている人間世界の共通性の領域(Gemeinschafts-Sphäre) ——、この原則的な理解の可能性を大きく包括しているもの、それが人間に固有の状況を作り上げている。」という一文が重要である。ちなみに、Gemeinschafts-Sphäreに「共通性の領域」という訳語が当てられているが、共同体、共同世界あるいはせめて共同性の領域といった訳語がふさわしいと思われる。なぜなら、諸個人はすでに存在している歴史的、文化的な共同体のなかに生み出され、発達し、自己形成をとげる。共同体存在として地上に降り立った瞬間に、ヒトはまさに人間となった。こういった

ことがポルトマンの人間理解の要となっているからである。このことはいずれ本稿の中で明らかにすることができるだろう。

(3) ポルトマンの方法

まずポルトマンの方法の要と目される部分を、ポルトマン自身のことばで語ってもらうことにしよう。⁽¹⁵⁾

人間の本性をまったく先入見なしに研究したものはだれもいないことをわれわれはよく知っている。だれでも、自分の分析の結果の一つ一つを白い紙のうえにかいていて、これをつないで一つの絵を完成するのではない。われわれの研究のさまざまな成果を、すでにできあがっている一つの像にはめこんでいくのである。その像の輪廓は、しばしばほとんどまだみることができないくらいだが、過去における精神の労作によって、またわれわれをとりまく世論の力によってそこにあたえられている。

ほとんどまだ眼にみえない、わずかしか画かれていない輪廓——それはわれわれの人間像の最初の特徴を意味するが——は人間という特殊な存在の全体性についての思想からつくられたものである。それは、この特殊な「歴史をもつ存在」の全体性を眺めることによってできあがったものであり、それは、特別な生物学的にとらえることのできる人間の一部分の特徴をきりすてて考案されたというのではない。(中略)われわれの研究は、生物学的につかむことができることでも、本質的には実験生物学の方法以外の方法でも研究されなければならない人間の側面によって規定されているという確信に立ってすすめられる。

全体的な完全な存在を、あらゆるものの基礎におこうとすると、したがってまた生物学的な人間研究の基礎にもおこうとすると、歴史というものを人間存在の一つの本質的な事実としてはっきり評価することを、生物学者からも要求することになる。このような背景の前では、先史学の資料もまた、以前によく使われた生物の発生という背景の前とは、まったくちがってみえるだろう。

動物の行動研究から人間存在の評価の基礎が確実にさがしだせると信ずることは、宿命的なまちがいである。なるほど生物学は、人間の特殊性がそれでいっそうはっきりする重要な比較ということはすることができるだろうが、しかし、この生物学的に特殊な性質をつかむことは、われわれのこころみのただわずかに一部分をなすにすぎないだろう。つまり、われわれ自身の人間としての生活事実から、それによってわれ

われの生涯の生き方をさだめるその法則を発見しようとするところこそ、われわれのめざすところである。

人間の個体発生を研究する場合のわれわれの立ち場は、(略)進化論にはあたりまえな哺乳類の発達というのではなくて、この発達は、むしろわれわれにとって、ちょうど昔の宗教画にしばしばみられるように、聖者の生涯のさまざまなエピソードが同時にかかれています、それが全体として効果があるといったように、人間の存在様式一般のいっそう広い、いっそう包括的な事実のなかの一部分としてみなければならぬだろう。

しかし「人間の存在様式」といっても、これは自然科学者にとっては、そう簡単には理解できない。人間の行動というものを考えにいらしてはじめて、人間の特殊性のほんとうの偉大さが発見されることになるのだから、人間存在のこの側面からも、われわれが関係づけて見る場合にだけ、人間の発達の比較生物学的な評価のいっそう包括的な理解ができるようになるだろう。

個体発生とはしかし、一つの完全な存在様式が計画的に順序づけられた発生・発達なのだから、その歩みの一つ一つが、この特別な芝居のなかの一幕、一幕としてみられたときにだけ、その本当の意味が理解できる。一つの発達の歩みのもっとも厳密な原因結果の研究でも、この原因と結果の系列がわれわれの知っている最終目標に達するために秩序づけられている、という事実を無視することはできないだろう。

形態学的な研究領域では、どんな胎生学者でも発達の状態を解釈するためには、生育を完了したおとなの形態について正確に知らなくてはならないというまでもない。つまり、この完成されたおとなの形態から、この発生・発達の段階をわれわれは理解するのである。(中略)行動の、いいかえると生育したおとなの形態の全生活様式の特殊性もまた、その発生・発達計画の特色のなかで、意味ぶかくみこまれた発達段階に対応する関係をもっている。

このあと続けてポルトマンは、人間においては本能体制が相対的に弱体化し、他の動物における本能と人間におけるそれと比較して、たいへんその意味が変わってしまっていることに注意をうながしている。そして人間存在の特殊性として具体的にいくつかの特徴を指摘する。個人的な自由な選択と決断にかかわる意志的側面、自らの世界を人間的世界として新たに創り出す文化的側面、またこういった側面と不可分の表象力、心像を思い描く力を挙げ、この力は自分自身をも表象対象とし、それを第三者として自分と

対置することができるものであることを強調する。そしてさらにつきのようについて。

動物がその存在様式に拘束されていることを「集中的」konzentrisch とよび、われわれ人間のそこからぬけだせる可能性を「遠心的」exzentrisch とよんで特徴づける。あるいは、また動物の行動は純粹に「主観的」であるのに、人間の行動は、補足する能力（表象によって自分自身を第三者的に把握できる力のこと——引用者）のために「客観性」をもつといたりしている。この動物と人間とのちがいは、動物はかれの生命を「生きる」leben のだが、人間はかれの生活を「指導する」「導く」führen ののであるという文句でもいいあらわされている。（中略）動物の行動は、環境に拘束され、本能によって保証されていると、われわれは簡単に特徴づけることができる。これに対して、人間の行動は、世界に開かれ、そして決断の自由をもつ、とっていいだろう。

ポルトマンはまず出発点において、ユクスキュルの生命観を肯定する。植物であるか動物であるかを問わず、あるいは単純であるか複雑であるかを問わず、生命は物理化学的な過程にけっして還元することができない、物質的な過程それ自体を超えた存在であるとする。そして環境世界、あるいは機能環という表現でもって把握された客体と主体との不可分の関係のあり方、すなわち一つの動植物の種がこの地上で生きてゆくうえで選び取った、あるいは選び取ることを強いられた生活の形態と生活環境との不可離性を認める。

そしてこの生命観と不可分となっている、世界の全体性、包括性を決して手放さないという方法論もユクスキュルから継承している。たとえば先に引用したユクスキュルの「人間の人格的な環境世界の外に、人間や動物の同胞の環境世界がすべてを包括するような計画のもとに包まれているのだという認識が、人間を高めてくれるのである。」といった表現にこめられた、包括的な方法意識をポルトマンは受け継いでいるとみなすことができる。フッサールはヨーロッパ近代の諸学が危機に瀕していると警告し、その危機のもっとも根底にあるのがガリレオを端緒とする自然主義的世界観にほかならないとした。¹⁶⁾ユクスキュルとポルトマンは、自然主義的世界観のまさに要をなす自然科学の分野において、フッサールの危機意識をわきまえたまれな存在であったといえよう。たとえばポルトマンは先に引用した文中で「われわれ自身の人間としての生活事実から、それによってわれわれの生涯の生き方をさだめるその法則を発見しようとするところこそ、われわれのめざすところである。」とのべているが、この表現はフッサールいうところの、生活世界への還帰にぴったりと重なる。

ポルトマンはこのような生命観と方法論をユクスキュルから継承したうえで、シェー

ラーが論じた「世界開放性」という人間の特殊性を媒介してユクスキュルを否定する。すなわち、人間という特殊な存在の全体性、特殊な「歴史をもつ存在」の全体性を思い描き、眺望して、それを人間の存在様式一般となす。そしてさらに、この人間の存在様式一般を媒介して、人間の個体発生を比較形態学的に研究しようとするならば、生育の完了したおとなの形態を正確に知ることが前提であるとする。なぜなら、おとなの形態こそが人間の存在様式一般の象徴にほかならないからであり、ぎゃくにいえば、個体発生とは一つの完全な存在様式が計画的に順序づけられた発生・発達なのだからという。

いじょうのような方法的な前提をふまえて、ポルトマンは人間の個体発生の比較形態学的研究に入ってしまったのであるが、具体的な研究成果の検討、そして日本の心理学界におけるポルトマンの評価や受容のされかたの検討などは、項目をあらためて考察することにしたい。

(以下次号)

註

- (1) 若林幹夫『地図の想像力』講談社選書メチエ、1995.
- (2) メルロ＝ポンティ『行動の構造』みすず書房、1964.
- (3) メルロ＝ポンティ『知覚の現象学 1, 2』みすず書房、1967, 1974.
- (4) アドルフ・ポルトマン『人間はどこまで動物か』岩波新書、1961.
- (5) 齊藤文嗣「子供概念の検討」『学習院女子短期大学紀要』vol.19, p.49, 1981.
- (6) アドルフ・ポルトマン『生物学から人間学へ』p.20, 思索社、1981.
- (7) 邦訳書はユクスキュル『生物から見た世界』思索社、1973.
- (8) (7)と同書、p.243-261.
- (9) (7)と同書、p.156-158.
- (10) (7)と同書、p.19-20.
- (11) フッサール『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』中央公論社、1974.
- (12) (7)と同書、p.226.
- (13) マックス・シェーラー「宇宙における人間の地位」『シェーラー著作集13』白水社、1977. ポルトマンがシェーラーのこの論文から受けた影響については、上記(6)と同書のp.253に明記されている。
- (14) (7)と同書、p.250-258.
- (15) (4)と同書、p.21-23, 80-95.
- (16) (11)と同書.
- (17) (12)と同書.

(さいとう ふんじ 日本文化学科教授)